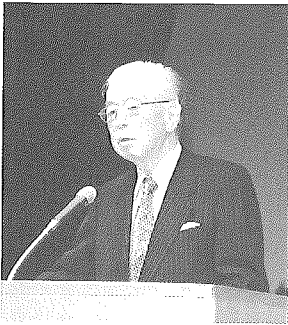


記念講演 「日本語のみだれ」



作家・文化勲章受章者

阿川 弘之

大正9年12月24日広島市生まれ

現住所◆横浜市

プロフィール

【略歴】

- 昭和15年4月
広島高等師範学校附属中学校、旧制広島高等学校を経て、
東京帝国大学文学部国文学科に入学
- 昭和17年9月
東京帝国大学文学部国文学科を卒業し、海軍予備学生となる
- 昭和21年3月
海軍大尉として復員
- 昭和21年9月
被爆した郷里広島を舞台に戦争の悲哀と生きる喜びを描いた
「年年歳歳」を発表し、文筆生活に入る。志賀直哉に師事
- 昭和28年2月
長編「春の城」により読売文学賞を受賞。以後、新潮社文学
賞、日本文学賞、毎日出版文化賞、野間文芸賞など多数の文学
賞を受賞。「雲の墓標」、「暗い波濤」、「山本五十六」
等海軍提督3部作など作品多数。日本文芸家協会、日本ペン
クラブの理事等多くの役職にも就任
- 昭和54年
恩賜賞・日本芸術院賞を受賞し、日本芸術院会員に選任。
昭和63年には日本芸術院第二部長に就任
- 平成5年11月
文化功労賞に選ばれる
- 平成11年11月
文化勲章受章
同じく平成11年11月、広島県名誉県民に選定される

このたび、この記念講演をお引き受けするについては、大会の実行委員長である日本海テレビ社長の馬場さんから、度々懇切なご連絡がございまして、そのやりとりの間に、当然のことですけれども、演題は何にするかという話が起こって、自分たち実行委員の方では「日本語のみだれ」ということをテーマにして話してもらえないだろうかという希望が出ているけれど、どうかというお話でございました。それは、実は私が常々大変関心を持っている問題でしたので、大変いいテーマを考えてくださったというんで、自分流にいろいろメモを作って、昨日、鳥取へ参ったわけでございますけれど、そのメモと、それから、途中少し引用して読みたい文献がありますので、失礼して座ってお話を申し上げます。お許してください。

現代の日本語が乱れているかどうかということについては、皆様方、ロータリアンの方々の中にも大別して2つのご意見があるだろうと存じます。1つは申すまでもなく、本当に今の日本はだめだと。乱れているし、非常に汚い言葉がさも当然のようにして若い人たちの間にまかり通っている。あれは何とかならんのかという、この慨嘆の声でありますね。

もう1つはそれと反対で、その意見は昔からじじいがいつの時代のどこの国でも言う決まり文句なんだと。言葉というのは時とともに変化するものであって、自然に任せておけば新しい時代の新しい国語が形をなしてくるんで、そんなにいちいち目くじらを立てる必要はないという、どちらかというと若い層の見解であります。それはその後の方の見解、意見にも十分の道理はあるのでありまして、いかに奈良朝万葉集の歌が美しい日本語で作られているからといって、今日万葉調で文章を書くというわけにはいきませんし、それから、能や狂言の言葉が大変風格、味わい、おかしみがあって結構だからといって「太郎冠者あるか」「お前に候」というぐあいに、我々が21世紀の会話をやるわけにはいかないんですから、変化するの仕方がないといえば仕方がない。自然に任せておけばいいんだという意見にももっともなところはあります。

アーサー・ウェイリーという人の名前をご存じだと思

記念講演「日本語のみだれ」

いますが、『源氏物語』を英語に訳した東洋学者の英国人でありまして、この人は自分の持っている美しい日本のイメージが壊されるのを嫌って、生涯とうとう今のどうか、近代日本、現代の日本には来ないままで亡くなったんですけれど、むしろ日本語は良くできたんです。ただし、アーサー・ウェイリーの日本語は平安朝の言葉だったそうですね。日本人の留学生がウェイリー先生のうちを訪ねていくと、「よくこそ来つれ」と言ったというんですね。笑い話のようなエピソードですけど、聞いてみたら事実だと言われております。その調子でどうも我々はやっぱり「よくこそ、来つれ」で、平安朝の口調で会話をしたり、ものを書いたりするわけにはいかないのは当然でありますけれども、私自身はどうかというと、やっぱりこれはもう、もうすぐ81になるところの古い、うるさいことばかり言うじじいのグループに属しておりますから、今日の日本語の乱れというのは非常に気になってしょうがないんです。乱れ方というより、その変わるのが自然だという意見にのっとるならば、変わり方が激しすぎる。それから、余りにも論理的でない変な言い方が、日本語の文法の上からいっても、もっと根本的な論理付けからいってもおかしい言い方が、テレビ、新聞、その他で平気で使われていると感じる側でございます。

フランスのエピソードというか、話がありまして、ある貧しいうちの娘がある青年と結婚することになったとき、その娘の母親が言うには、「うちは貧乏で娘に十分な持参金を持たせてやることができないけれども、ただ、うちの娘には正しい、美しいフランス語がちゃんと教えてあります」と言ったところが、それを聞いて相手の青年が、「それは何よりすばらしい持参金だ」と答えたという話を聞いたことがありますけれども、今の日本のお母様で、娘さんを嫁がせるときに、こう言える母親というのは、よほど珍しいのではないかと思います。このエピソードには、やはりフランス人が、自分たちの言語に対する自負と誇りとを非常に持っているということが感じられるわけでありまして、私はフランス語はだめなので詳しくは知りませんが、フランス文学とフラン

ス語に通じている友人の話聞いてみますと、現在のフランスでも、アカデミー・フランセーズというんですか、フランスのアカデミーがよろしいと認めないと、いくら町で若者たちの間にはびこっている新しいフランス語、あるいは外来語でも、辞書に収録することはできないんだそうですね。要するに正式のフランス語と認めない。アカデミー・フランセーズというのもよく知らないけれども、日本でいえば、芸術院と学習院と文化庁とを一緒にしたような機関かと思えます。そこがフランス語の乱れについて、非常にやっぱり厳格な目で行き過ぎが起らないように見守っているということでもあります。

世界で一番美しい言葉というのは、よくフランス語と北京語だと言われますが、北京語の方は、共産主義革命とまたその後で文化大革命という大混乱を浴びましたので、果たして今日も昔の美しい形をそのままとどめているかどうか。これも私はよくわかりませんが、その2つの言語が世界でも一番美しい言葉だとしても、我々の日本語もやはり血統正しい、美しい言葉であります。日本語が血統正しい言葉だということを言った人のことは、後で触れますけれども…。

要するに我々の国語、日本語というものが伝統ある日本文化のほとんどすべてをしょってると考えていいので、これはやはり自然に変わるものかもしれないけれども、注意深く、そして大切に扱わなくてはならないと私などは思います。大体、私のようなうるさいじじいが始終うるさいことを言っているにもかかわらず、うるさいことをうんと言ってプレーキをかけて、ちょうどいくらいなんです。

なぜ、しかしこう急速に乱れてきたかということを見ると、やっぱり56年前の敗戦が原因ではないかと私には考えられてなりません。あの完全敗北に終わった対米英戦というものは、政治上の極めて愚かな選択であったと言わざるを得ないんですけれども、「泥棒にも三分の道理」といって、あの戦争を起こした日本側にもそれなりのやはり幾分か理由はあったし、戦のことを別にすれば、それまで明治維新以来というか、古くからいえば奈良朝以来、我々の祖先が育てて築いてきた日本の文

化、伝統というものは、これは大変立派なものだったんです。ところが「勝てば官軍、負ければ賊軍」で、負けた途端にやはり日本の古いものは全部だめという意識が国民全体の間にも染み込んでしまって、また、アメリカ軍でしたけれど、占領軍がある意味では史上大変珍しい寛大な占領軍で、日本が再び軍国主義の国家にならないようにと日本人を洗脳した傾向があります。そのために今の若い世代は、日本のいろんなものに自信が持てない、自信喪失症である。その1つが、やはり日本の国語に対する自信が持てないために、それが乱れてくる、汚くなっていくことに対して平気なのではないかというふうには私は考えるものであります。

そのうるさいじじいがうるさいことを言うについては、国語、もっと広く言うと言語というものを、話し言葉と書き言葉に一応分けて考えなくてはなりません。別の表現をすれば、音声言語と文字言語であります。音声言語というのはその場で話されて聞いて、そのまま消えてしまう言葉であります。それに対し、文字言語、書き言葉の方はそれまで蓄積してきた文化の成果を、あるいは技術も含めてですけれども、後の世に蓄積し、残していく役割をする言葉であります。20世紀の後半から録音、録画の技術が非常に発達しまして、今日では話し言葉、つまり音声言語はその場限りで消えてしまう言葉だとは一概に申せませんが、根本的な性格としては文字言語の方が大事なのです。

大体、それでは文字というのはいつごろ人類が持ったかということ、これは幸田露伴先生の文字について書かれたものがありますので、それをちょっと読んでみます。少し長くなりますがお聞きください。「文字の大切なものであることは今さら申すまでもありません。これがあつたために人類はほかのものとは比較にならぬ進歩を遂げて、いわゆる万物の霊長となり得たと申してもよろしいのであります。文字は直接に人の意識の世界のことや、感情や知識を記しとどめ、またそれらを表すところの言語を記しとどめて、これを土や石や金属や木片や紙や布やその他のものに寓在せしめ、そして見るべからざるものを見得るものとなし、保存しがたいものを保存し得る

ようになし、その見得るといふことと保存し得るといふこととの性質から、堆積ということが惹起しました。堆積というのはたまりたまつて多くなり、大きくなり、高くなり、密になることであります。草や木の葉の堆積は、ある度の分量と密度とを得ると微妙の作用を起こして熱を発します。人類百般の事象の記録が堆積しますと、その微妙の作用によって考察がおのずから生じ、人類の意識の世界は次第に拡張し、感情は次第に洗練され、知識は次第に増大されて、いわゆる文明を醸し出すに至るのであります。文字ができる前の人類の進歩は、いかに遅々として幾万年をも過ぎたことでありましょうか。文字が生じ出されてからの人類の進歩は、いかに俄然として急激迅速になったのでありましょうか」というふうを書いていて、そして日本人の使っている文字、本来は支那文字ですね、この支那文字はいわゆる漢字ですけども、耶蘇紀元前およそ3700年ごろから生じたらしく思われるということを書いておられます。紀元前3700年という今を去る約5700年で、非常に古い時代に我々の今使っている文字の元が生じたということになります。

音声言語、話し言葉の方はもっと古いんですね。これは片っぱは1000年単位に対して100万年単位になります。最近の人類学の研究成果では、人類のヒトという哺乳類の分化したのは300万年前とかそういう大変古い時代になっているようですけれども、仮に100万年前と考えても、5700年前の大昔とはケタの違う大昔なんですね。ところがそれこそ文字で書きますと、千年も万年も百万年も同じ2字か3字で表現されるものですから、余りびんとこないんですけども、これを鉄道のキロ数で考えると非常に違いがはっきりと少なくとも私の頭には残ります。1キロを1000年と仮定しますと、東京一下関間を従来の在来線の東海道本線、山陽本線で走って行って、下関がちょうど1,095.5キロメートルですから約100万年前で、人類の話し言葉というのは人類の歴史が100万年だとすれば下関でできたんですね。それでは文字がいつごろ現われるかというので、下関から列車を東京向けに走らせてみますと、今日は鳥取地区での大会ですから、山陰本線まわりにしろと言うのなら山陰本線をまわってもいい

ですけども、東京行きの学術研究列車が、松江を過ぎたって鳥取を過ぎたって文字なんか現われてこないんです。京都を過ぎてもだめで名古屋を過ぎてもだめです。東京都内へ入って、品川に停車してやっとキロ数が1ケタになる。品川は東京を去る6.8キロメートルの地点でございます。それで1キロは1000年だという約束に従いますと、品川はその東京の現在から6800年前ですから、品川に着いてもまだ文字が出てこないんですね。皆さんが飛行機で鳥取空港から羽田へお着きになってモノレールにお乗りになる、モノレールの終点の浜松町。大体、この辺で人類は文字を持った。ヒトの特徴は2本足で歩くことと、自由になった前足、つまり両手で道具を作ったことと、それから言葉を持ったことだとよく言われますが、その言葉を持ったのが下関だとすると、それが、文字を持ったのはなんと東京都内ももう新橋に近い浜松町なんですね。それで、新橋が東京を去る1.9キロですから、1900年の昔。ほぼ卑弥呼の時代でありまして、ここで日本に初めて文字だの金印だのが渡ってくる。大変新しいといえば新しいんで、明治維新なんてものは、列車が東京駅のプラットホームへ滑り込んでから始まるんでありますが、そういう尺度で考えてみると、実に、文化の蓄積というものは何も起こらない形で、下関から品川過ぎるまで、人類はいわばヒトとして新しい種に属しながら暗黒時代を過ごしてきたということになります。しかし、尺度を変えて言えば、この浜松町から先、あるいは新橋から東京寄りのたった数キロの間でも、文字言語というものは、実に実に長い、実際は紀元前から何千年、4000年も5000年もの歴史を持っているわけであります。

そして不思議なことには、露伴先生の言う支那文字が生まれたのと、それからシュメールの楔形文字、あるいはエジプトの文字が生まれたのとは、お互いに何の関係もないんですけれども、人類の歴史の上ではほぼ同じ紀元前3000年ごろのことのようであります。恐らくそのころ、100万年来、少しずつ進んできた何かの堆積が文字という形で現われたんだと思います。これは、露伴先生の書いておられる通り、非常に重大なことでありまして、これで我々の持っている文明、文化、あらゆる芸術、学

術技術というものが今日の段階に発展する基礎ができた。

その大切な文字を、我々の場合でいいますと日本語ですが、これはどういう意味でどういうふうに使おうべきだということを示すものは、申すまでもなく国語辞典です。国語辞典の持つ役割と国語辞典を編さんする編さん委員の責任というのは、非常に大きいと思わなくてはならない。私が現在持っております国語辞典が戦前のものを含めて何種類かありますけれども、戦後刊行された、比較的近年刊行されたものでは、小学館の日本国語大辞典、ちょうど全10巻のものがうちにありますけれども、これが一番しっかりした辞典で毎日のようにこれのお世話になっております。この日本国語大辞典が最近、第二版を刊行することになりまして、今まで10巻だったものが13巻になる。そして用例だけでも約25万項目が増えるということで、これは立派な辞典ができるに違いないというんで、早速申し込みました。

そして今、うちに順次刊行中の日本国語大辞典のあいさつお願の巻が毎月届いてきておりますけれども、完結しておりませんから、わ行、ら行の言葉の座はまだ引いて見ることはできないんですが、ばらばらと見ていたら意外なことに気付いた。それは、「いぎたない」という言葉ですね。「いぎたない」という言葉は平安時代から使われている言葉で、この「い」は漢字を当てるなら「寝る」という、寝台車の「寝」という字を当てる言葉です。いねもやらずという「い」でありまして、「いぎたない」という日本語は寝姿が汚い、あるいは寝相が悪い、むやみに眠りをむさぼっているというふうな意味で1000年来使われてきておりますし、明治になっても明治の作家たちはきちんとその意味で使っておりまして、少しも別の逸脱した用法にはならなかったんです。ところが今から70何年前昭和に入って文士たちの中にこれを誤用する人が出てきた。「い」の意味が、接頭語の「い」の本当の意味が忘れられて、何となく薄汚い、だらしが無い、汚らしいという意味と同じような意味に使って、例えば、何々子は母の側へ来て、いぎたなく座っておしゃべりを始めた、というふうな使い方をする作家が出てきたんです。実名は遠慮しますが、それから自分のいぎた

記念講演「日本語のみだれ」

ない情欲につくづく嫌気がさしたとか。寝ることを言っているのに、普通の態度とかその本能とか情欲とかいうものを汚らしい、だらしが無いというふうに表示するときにこの「いぎたない」を使うようになった例が幾つもあるんですね。これをこの第二版の国語辞典が引用例として挙げています。これは私どもに言わせるとけしからんことなんでありまして、前に私が使っておりました第一版にはこういう用例は載ってないんです。載っていないのが当然なんでありまして、普通、若い人たちは、いろんな今の言葉も出ての方が便利でいい辞書だと、あの字引にはこういう言葉が載っていないから、あれはだめだよというふうにする人が多いかもしれませんけれど、違うんでありまして。さっきのフランス語の例で言えば、フランスのアカデミーが認めない言葉を載せていない辞書は、それだけの見識の高い優れた辞書なんで、言葉が載っていないことはある意味で辞書の価値を決めるのに、こんな言葉は載せていいですけど、こんな用例を模範として載せる辞書というのはちょっと困りものなんですね。

それから興味を持っていろいろ見てみると、このごろのそれこそ乱れている日本語、特に最近、テレビでも新聞でも始終見かける「立ち上げる」という言葉ですね。立ち上げるというのは、さっきもちょっと触れた、論理的に矛盾してる、文法的に成り立たない変な用語ですが、この7~8年か10年ぐらい、やたらに使われるようになった。なぜ文法的にも論理的にも矛盾するかというと、「立つ」が「立ち」の終止形ですが、「立つ」「立ち」は自動詞であります。「立ち上がる」、これが立つですね。「上げる」というのは他動詞であります。「このコップを持ち上げる」というのは「上げる」の用語でそれしかないんです。それを「立つ」と「上げる」と一緒にして「立ち上げる」という言葉を日本語として認めるというのは、これは論外のさたなんです。どうも小学館の悪口を言って具合が悪いけれども、日本国語大辞典第二版は25万用例を増やし、50万語を増やしたというんですけども、こんな言葉を増やしたのを手柄にしては、この辞書の価値は下がると考えなくてはならない。

そのほか調べてみれば「生きざま」なんて言葉は、も

うどの辞書にも日本は寛大というか載っておりますけども、「死にざま」という言葉はありますが「生きざま」という日本語は本来ないんです。これは戦前の上田万年先生の編さんされた国語大辞典なんかを見てみれば、あるいは言海を見てみれば決して載ってません。「死にざま」という言葉は載ってますけど、「生きざま」という言葉は載ってない。だれかが使い始めたのをみんながまねして平気で使うようになった。それから、これは載ってるとか載ってないとかいう言葉の問題と少し違いますが、近ごろ何とかじゃないですか、私って臆病な人間じゃないですかという言い方をします。それから、地下鉄とか乗ってさあ、イタリア料理とか食べに行くと、という。「とか」がなぜあそこに入るのか。それから「あげる」という言葉がありますが、これも「立ち上げる」の「上げる」と同じで、「上げる」にはこう上げる意味と一種の敬語としても、目上の人にあげるという言い方があります。「差しあげる」のあげるですね。ところが、いつのころからか、もちろん敗戦後ですけども、猫にかつおぶしをあげる、と言い出した。犬にご飯をあげる。最近、植木に水をあげる、というのもあるようでして。日本語の特徴の一つである丁寧語、敬語が非常にやっかいなんです。敬語を大事にして「あげる」という言葉が犬、猫、植木にまで及んだのかということ、そうじゃないんですね。お医者さんが言うからさあ、赤ちゃんにミルクをあげたら、とこう言うんですね。医者に対しては丁寧語を使わないで自分の赤ん坊に対して丁寧語を使うという、本末転倒もはなはだしい。

それからまだ幾らでもありますけれども、「べき」という助動詞は「べく」「べし」「べき」「べかれ」と変化する文語体の助動詞でありまして、「べき」という場合は、例えば万葉集の歌を引けば、「磯の上に生ふる馬酔木(あせび)を、手(た)折らめど、見すべき君が、ありといはなくに」という体言と結びつくのが連体形ですから、体言と結びつくのが当然であり、それしか使い方がないはずなんです。体言というのは名詞あるいは代名詞です。だから、何とかすべきだと思ったけれどもとか、すべきことであるとか、そういうふうにするのが普通なのに、

このごろ新聞を見てても、「早期解散は避けるべきとの意見もあり」というふうで終止形のような形で使われることがしばしばあるんです。

私がいい新聞だと思っている産経新聞にまでこれが出てくるんで、産経抄の記者の石井英夫さんに手紙で、せめて産経新聞はあれ、やめてもらえませんかねと出したら、いや、とつても私どもも幾ら言っても隔々の記者までそれが及ばない、もう定着しかかってどうしようもないというんで、そんなら仕方がないと思ってよそさまのことは言わないことにしましたけれども。うちの娘がやるんですよ（笑声）。うちの、ご存じかと思いますが、阿川佐和子といまして、父親よりずっと有名な売っ子でございましてですね、つまらん話をしますと、一昨年、地中海で船旅をしておりましたら、「クリスタルシンフォニー」という5万トンの船ですけれども、900人の船客の中に20数人日本の客がいて、その中に私のことを陰で「阿川弘之さんという船客が乗っているけど、あれは阿川佐和子さんの何かになるの」と聞いているんですね（笑声）。そしたら知っている方があって「いや、あれはお父さんですよ」。そしたらその質問した方の船客が「ああ、そうですか。それでお父さん、何なさる方って言ったって言うですからね。今や娘の方を尊敬しなきゃいかんのかもしらんけれども（笑声）。この娘が、やはり時々日本語で間違いをやる。「たまには休みをたっぷり取るべきだと思ひ」という文章を書いているから、ほかの若い作家には私は言いませんけれども、娘にはすぐ文句をつけてがんがん、文語体で「べき」なんて言葉を使うのならちゃんと正しく使えと。そんな難しい文語体の助動詞を使いたくないって言うんなら、「たまにはたっぷり休みを取った方がいいと思って」とちゃんと口語体に直せと言ったら、さすがに反抗しませんでしたけど。こういうことをいちいち挙げだしたら仕方がないくらい、現在の日本語は乱れております。

先の、今、私がうるさく言っている人間の一人ですけれども、もっと古い明治、大正初年になりますと、もっとも厳しい人があったようです。フランス語や北京語の方が古い言葉です。ですけれども、日本語は血統正

しい言葉だったということを行った人は岡山のすぐ近くの福山、松永の近くで生まれて育てられた英文学者の亡くなった福原麟太郎先生であります。福原さんの随筆の中にですね……福原先生は英語学者、英文学者ですけども、高等師範学校の生徒のころに英語を岡倉由三郎に習ってるんです。この岡倉由三郎はご承知のように岡倉天心の弟です。英語にも非常に厳しかったけれども、その英語を訳読したり、答案に日本語で書いたり、英文和訳で書いたりする日本語についても、非常に学生に厳しいことを言ったらしい。近ごろ、というのは大正時代の話ですけど、歌舞伎の助六を見ていても「それではお気をつけて」と歌右衛門が言う。歌右衛門の揚巻が言う。これを「お気をおつけになって」になってはいけななんだと。それから、また、ごちそうは「うまい」のであって、「おいしい」というのは女言葉だ。諸君が使ってははいけない。そういうのが数限り出てきて、つまり、正純日本語をだれもかも使ってもらいたいのであると、福原麟太郎先生が随筆の中に書き残していらっしやいます。

そして、もう1つ、岡倉由三郎先生が若い福原麟太郎ら学生たちに言った言葉は、学年末の試験の前になると、国語は正しく書いてほしい、縦書きにすること。それから、何々だったという言い方はやめてほしい。ちゃんと「であった」と書く。そういうことを厳しく言われたそうです。これは、ちょっと今の方には意外に響くかもしれません。「だった」という言葉はいけないかと。いけなくはない。いけなとはもう言い切れないでしょうが、「だった」というのは「であった」の簡略体。いわば書でいえば行書体、草書体でありまして、逆の言い方をすれば口語としては使ってもまあいいだろうけれども、楷書体であるべき文字言語の場合には避けたほうがいい言葉なんですね。私自身は使います。特に若いころのものには、割にちょいちょい使っております。「であった」という言い方がちょっと堅苦しいと感じるときには「だった」と使いますし、使っておりますから余り大きな口はきけませんけれども、

記念講演「日本語のみだれ」

このごろの人、大変人気のある作家でもその書いているものを見ると、「だった」がやたらに出てくるんですね。例えば「きのう飛行機の中が満席だった。降りたところは鳥取空港だった。それから宿へ行く道はずっと海沿いだった」。だった、だった、だったという、安物の機関銃じゃあるまいし（笑声）。これはやっぱり少し国語の形、美しい形について神経質に思う人間なら、ちょっと読み進めるのが嫌になるような「だった」の連発があるんです。近ごろの作家のものを繰ってご覧になると、大抵出てきます。だった、だった、だった、だった。古くは慶応4年生まれの岡倉由三郎が、「だった」という言い方を、「だった止め」をやめてくれと学生たちに要望されたそうですが、比較的新しくはやっぱり井伏鱒二さんが、これも福原麟太郎先生に近い福山の近在のお生まれですけども、よく若い文士、若い文士たちといっても昭和20年、30年ごろの若い文士、つまり我々のような者に向かって、森鷗外は「だった」という言葉は1つも使っていないよと言われた。私は統計的にチェックしてみたわけではありませんから確信を持っては言えませんが、鷗外には「だった止め」はないんでしょう。やはり井伏さんの全集にも、「だった」で終わる文体はないのではないのでしょうか。

これがやはり日本語というものを大切に人の態度であり、態度であるべきでありまして、「だった」という言葉は字引を引いたって出てきませんが、「いぎたない」の誤用を用例として認めるとか、「立ち上げる」なんて日本語として成り立たない用語を一般に使われているからといって、辞書の中に入れるなんていうのは、やっぱり論外のさただと思います。日本語大辞典の第一版の編集員には私の友人の、つまり同世代の馬淵和夫なんていう国語学者が加わっておりますけれども、第二版の編さん委員を見ると、顔ぶれががらっと変わるので、やはり戦後派のそういうことに寛大というカルズな人たちが編さんしているとしか私には思えないんです。

ところで、その美しい日本語であろうと乱れている日本語であろうと、日本語の特色というものは何かということをお考えすると、これは世界に兄弟語が見つからない大変孤立した言語だということなんですね。血統正しい

かもしれないけども、由緒、故事、来歴ははっきりしないんです。今日の中華民国、中華民国というのは台湾のことですけど、あるいは中華人民共和国の人たちと、よく支那と日本は同文同種なんてと言いますが、全然言葉は違うんで、文法の形からしてチャイニーズ・ランゲージというものは、むしろ西洋の言語と同じインド・ゲルマニッシュに近い文法形体を持っているのに、日本語は全然違うんですね。「僕は君を愛す」というときに、「僕は」の次に相手の対象語の「君を」が出てくるんですけども、英語でも支那語でも「アイ・ラブ・ユー」私は愛する君を、なんですね。中国語の場合は「ウォ・アイ・ニイ」、ちょっと発音は悪いかもしれませんが、われ愛するなんじを、になるわけです。全然同文同種ではないんで、漢字という文字を千数百年前に取り入れて、借りて日本語の表現に使ったというに過ぎないんです。中国語というと現代の言葉になりますから、支那語、チャイニーズと言いますが、チャイニーズとジャパニーズは親類関係にはないんですね。隣の韓国語、これも韓国語と言うと北朝鮮の言葉は違うのかということになるから朝鮮語と言った方が一般的ですけど、朝鮮語と日本語はかなり似ていると言われますが、耳で聞いて大体分かるなんてことはないですね、韓国語は。おわかりになる方はごくわずかしらっしゃらないと思う。それがヨーロッパへ行きますと、スウェーデンとノルウェー、あるいはデンマークの人たちの間は大体わかるそうです。それから、スペイン人とイタリア人の間でもやっぱりラテン系の言葉、大体分かるんじゃないでしょうか。朝鮮語と日本語は兄弟語だといっても、どうもそういうふうに近い兄弟ではないらしい。どこから来たか。

私の国文科の同時代の100年に1度出るか出ないと言われた大野晋さんが、南インドのタミール族のタミール語と日本語が非常に深い関係があって、日本語がタミール語から出てるんだということをしきりに熱心に生涯の仕事として主張し、研究し、発表しておられますけれども、私はもう少しよく大野説を読んでみないと、納得できないんですね。言葉だけが移ってくるということはあり得ないんで、文物、制度、その人種の種が移ってきて、

それじゃ、日本に……タミール人というのは北インドの人たちとは違う、むしろ今日のスリランカ、南インドからセイロンにかけて住んでいる人たちのようですね、それならばあそこにいる人たちと似た顔立ちの日本人がいなくちゃならないし、あそこで行われた文物、制度が日本へ移ってきていなくては、言葉だけが移ってくるということはありませんかと思うんです。その辺は大野さんはどのように解釈しておられるのか、もう一つ熱心に読んでいないからわからないんですけれども。そのインドの北の方の北方インドの言葉から地中海沿岸まで、あるいは英国まで、あるいは北ヨーロッパまでの言語はよく言われる印欧語族、インド・ゲルマニッシュ語とって全然違うように見えるけれども、これは言語学的に見ると1つの系列につながる兄弟語だそうでありまして。その兄弟語が日本語の場合見つからない。孤立している。しかし、孤立しておりますけれども、度々言うように伝統のある血統正しい美しい言語でありまして、もちろん個人の性格と同じで、言語もおのおのの言語が欠点と美点と両方を持っております。日本語にも非常に豊かな表現力を示す素晴らしい美点と、それから、論理的に物事を説明するのに不向きな欠点と、両方の面があります。論理的に物事を説明するのに不向きな言語だというのは、1つは関係代名詞が欠けているからなんです。記事で実際に見たことがありますけれども、「拳銃を構えて逃げる犯人を追跡していた警官が」という記事がありました。いいですか。拳銃を構えて逃げる犯人を追跡中の警官がという、拳銃を構えているのはどっちなのか、拳銃を警官が構えて追跡しているようにも取れるし、犯人が拳銃を構えて逃げるのを警官が追跡しているように



も取れるんですね。これは関係代名詞が欠けているからなんです。そのために物事をきちんと論理的に表現しようと思うと、大変厄介なことになる。一人称、二人称が非常に多いんですね。僕、わたし、わたくし、おれ、拙者、わが輩、幾らでもあるでしょう。あたい、わて、うち。それで、それぞれの場合によって、その中にはもう廃語に近くなったものもありますけれども、使い分けしなくちゃならないですね。私が今年日本海テレビに就職した新入社員だとして、馬場社長を捕まえて「君は元、日本テレビにいたんだって」と言ったら、やっぱりちょっと具合が悪いじゃないですか。「あなたは」か何かでないとやっぱり具合が悪いでしょうね。その複雑多岐な一人称、二人称を、文章の中では略すんです。西洋の文章のように、私は私の本を持って私の学校へ行って私の何とかをというふうに、マイ、ミーを日本語で繰り返したらうるさくって、とても読めたもんじゃありません。「お母さん、本を持って学校へ行ってくるからね」で通じるんですよ。だれが行くか、私が行くんですよ。どこの本を持っていかっていったら、自分の本を持って行くんですよ。どこへ行くかっていったら、自分の小学校へ行くんですよ。それで通じるんだけれども、これを論理的に問い詰めるとわからない。はっきりしないんですよ。「は」という助詞は日本語では、普通の説明では英語のbe動詞。アイ・アムのアムとかビー・イズのイズに当たるというふうに説明されておりますけれども、これも実は非常にあいまいなもので、必ずしもbe動詞と同じとは言えない。うなぎ文というそのことを説明する日本語の例がありまして、「僕はうなぎ」だって言うんですね。デパートの食堂へ入って、仲間同士5~6人、何にするって言って、「僕はうなぎだ」と言う（笑声）。「あたし、それじゃ天ぷらそば」私は天ぷらそばなんです。これは、アイ・アム・天ぷらそばって言っているんじゃないんですよ（笑声）。「僕はうなぎどんぶりを取ってうなぎを食うよ」ということを、「僕はうなぎだ」と言うんです。それで少しもおかしくない。正しい日本語です。それじゃあ、「吾輩は猫である」というのは漱石が猫を食う話かっていったらそうじゃないですね（笑声）。これも日本人

記念講演「日本語のみだれ」

なら別に目くじら立ててとやかく言わなくてもわかりますけれども、やはり論理的に問い詰めると、はなはだ変なことになる。

それから同音異義語が非常に多い。これはそれぞれ隣の大陸、支那の文字とさっき言ったように支那の文物、制度を同時に持ち込んできて……向こうには四声、4つの声といて、非常にはっきりしたアクセントがありますね。マージャンなざる方がこの中にいらっしやるでしょうけど、ウーソーと普通言って、ウーピンと言っただけでいいでしょうけど、あれは5を表す中国語は三声でありまして、ウートンなんですね。基本的に4種類のアクセントが非常にはっきりしてきますから、耳で聞いても字で書いてももちろん、字が違いますからわかりますけれども、日本語の同音異義語に当たるものが、耳で聞いてもチャイニーズの場合ははっきりわかるんです。ところが日本語になりますとこれがアクセントが、日本語にアクセントがないわけではないけれど、非常にフラットになってしまう。例えば「かんちょう」という言葉を考えてごらんになっても、すぐ皆さんの頭に浮かぶ「かんちょう」は違うと思いますよ、それぞれ。この県民会館の館長さんの「かんちょう」を思い浮かべる方もあるだろうし、小さい赤ちゃんがいてね、ちょっと便秘気味で、流腸薬の「かんちょう」を考えられる方もあるかもしれない。それから、軍事に興味のある方なら、軍艦の艦長も「かんちょう」ですね。それからスパイ（間諜）も「かんちょう」ですよ。これ、全部同じアクセントなんです。これが非常にわかりにくい。

そのわかりにくい一番いい例は、やっぱり法律用語なんです。我々の身近なところでは交通法規。皆さん、車の免許をお取りになった方はまるちゃん式でいろいろ答を書かされて苦心なすったと思いますけれども、その前に交通法規を読まなきゃなりません。わかりますか、あれ。非常に変てこな回りくどい、わかりにくい嫌な日本語で書いてあるんです。私はそのことを昔、警視庁の交通課長の知り合いに言ったら、いや、それは阿川さん、違うんだと。分かりやすく書くのが法律の用語じゃないんだ。どこからつかれても問題が起らないようにき

ちんと物事を決めるのが法律、あるいは法規の用語だからどうしても文章がああいうふうになるんだと言われて、ああ、そうかと思って納得しましたけれども、これは美しい日本語にはならないですね。多分、少しでも外国語ができる人なら、こういうものは英語で書かれたものを読んだ方がわかりが早いと思います。

それから日本語の、何か欠点の方ばかり言ってるようだけれども、特徴の一つはやっぱりさっきも言った、敬語が非常に複雑である。それから男言葉と女言葉がこんなに複雑、多岐に分かれている言語は珍しい。フランス語や英語にも女言葉はあるそうです。例えば、ベリー・ビューティフル、ベリーと言うところをソー・ビューティフルというふうにして、ソーというのをたくさん使うと女っぽく聞こえるというふうに使ったことがあります。私は英語の、男言葉と女言葉の区別まではわかりませんが人の話ですけれども。その程度の男言葉、女言葉の違いはあるそうです。日本語のようにはっきり、といってもこのごろあんまりはっきりしないですね。女の子の方が、てめえ何とかなんて言っているからはっきりしなくなっていますけれども、本来は非常に男言葉と女言葉は違っていたんです。違ってて複雑なんです。尾ろくな話になりますけれども、川柳で「屁ならまだいいが おならの恥ずかしさ」という。これ、何のことを言ってるかという、屁は男言葉なんですね。ガスを出すことを屁というのは男言葉で、おならの方は女言葉なんです。だから男がブツといわせたぐらいならまあいいけれども、妙齢の奥さんがブツといわすと、これは恥ずかしさってということを言っている川柳なんでありまして、「屁ならまだいいが おならの恥ずかしさ」。

フランスあたりでもそこまではっきり男言葉と、女言葉の違いはないでしょうけれども、海軍で聞いた話では、海軍大学校を出たあたりのエリートの大・少佐クラスがパリ駐在を命ぜられているんですね。英国駐在、ロンドン駐在、ニューヨーク駐在、ワシントン駐在、ベルリン駐在、パリ駐在と、毎年優秀なのが2年単位で外国へ出されるわけですが、大・少佐の若いころに外国へ出されるのは、大使館の在外武官の役目をしろ、手伝いを

しろというのではなく、その2年間しっかりその国の言葉を学んできて、将来、その方面では何々少将といわれるようになれというんで、語学研修に行かされるんです。ところが、当時の貧乏海軍の費用では奥さんがあっても妻子同伴でパリへは行かせてもらえませんが、1人で行って下宿の飯を食って、冬は薄ら寒いパリの下宿で寂しく暮らしているんで、あまり上手になれないんですよ。これを趣味と実益をかねて大変短期間にフランス語を上達する方法が1つありまして、それはパリ娘と仲良くなって同棲するんですね、一時。そうすると、2年間ぐらいで流ちょうなフランス語がしゃべれるようになって、書けるようになって帰ってくるんですが、悪いことにフランスの女言葉を覚えてくる。それでその人が中佐、大佐、少将と昇進しまして、近年の例でいえば、日本軍の仏印進駐の問題で、東京にあるフランス大使館の在外武官と打々発止のやり取りをしなくてはならないというときに、海軍省へ呼びつけて、その少将が得意のフランス語で、「そのようなことは、帝国海軍としてはどうも容認できないのよ、よくって」(笑声)てなことを言ってますね、何だか話がぶち壊しになったという話を聞いたことがあります。それも今申したような露骨なことではないんでしょうが、現実に我々の使っている、あるいは最近まで使っていた日本語では非常に女言葉と男言葉の差が激しい。それから敬語が非常に難しいですね。今、敬語をちゃんと使いにくい世代が、使えない世代がたくさん生まれておりますけれども、敬語の複雑なことでも日本語は大変際立っております。それで世界一難しい言葉とよくよその国の人に言われるんですが、世界一難しいかもしれないけれども、福原麟太郎先生が言われるように、血統正しい美しい、そして豊かな表現力を持った言葉であることもまた間違いないし、仮に欠点があっても、これが唯一の私どもの言語でありますから、言語であるということは文化であるということなんで、これを大事にしなくては、我々の伝統文化そのものをごちゃごちゃに壊して捨ててしまうということになりかねない。

日本語は豊かな表現力を持っているということでは、例えば万葉集の歌を思い出してみても、「東の野にかぎ

ろひの立つ見えて かへり見すれば月かたぶきぬ」。この、アメリカの大平原やロシアの大ステップや、あるいは中華人民共和国西部のゴビ砂漠だの新疆のタクラマカン砂漠のような、そんな広大な景色は日本にはほとんどないんですが、それでも「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」というふうな、大変雄大な景色を31文字で、先祖が見事に表現してくれているのです。しかも、どこにも外来語は入っていないんです。ひんがしのぬに、「ぬ」は野ですね、ぬにかぎろひの立つ見えて、かへり見すれば月かたぶきぬ。これがずっと後の俳句になりますと、「菜の花や 月は東に日は西に」と。これもやっぱり外来語は全く入ってないですね。それであれだけ美しく日本の持っている美しい自然、あるいは人情を細やかに美しく表現できる日本語というのは、それこそ我々の宝物だと思ってよろしいんですが、この和歌や短歌というのは、奈良朝でなくたって今日においても外来語をあまり使わない傾向がある。それは、柿本人麻呂以来の大歌人と言われる斎藤茂吉先生の歌をとってみても、敗戦後の絶唱といわれる「最上川 逆白波のたつまでに ふぶくゆふべとなりけるかも」あるいは「かりがねも 既にわたらずあまの原 かぎりも知らに雪ふりみだる」「このくにの 空を飛ぶとき悲しめよ 南へ向かふ雨夜かりがね」。敗戦というような言葉は一言も使ってありませんけれども、日本敗戦の悲しみを茂吉先生が絶唱した短歌であります。20世紀の40年代、46～47年ごろに、作られた歌であるにもかかわらず、大和言葉だけで成り立っていて、外来語は一つも使われていないでこれだけの格調のある表現ができています。

それを思うと、我々はこの大和言葉、そしてもちろん今から千年以上前に入ってきた、取り入れた大陸の言葉の日本語化したものを、そして、漢字をそのまま残したものを、簡略化して仮名文字、平仮名文字を作ったものを、うんとうんと大切にしなければならぬと思うわけでありまして、ロータリヤンの皆さんにはいろんな奉仕、それから立派なお仕事がおありになるとは思いますけれども、今日の私の話を聞いて少しでもご賛同いただけると

記念講演「日本語のみだれ」

ころがあったら、日本語の乱れを少なくともはびこらさない。許せる程度の緩やかな変化でとどめてほしい。どうか、そのサービスもお願いしたいと思います。

ただ、複雑で論理的に表現の十分できない、あるいは一方、非常に豊かな表現力を持った、そういう日本語と申しまして、各地方によって言葉が違います。少なくとも明治時代までは、身分、職業、階級によって言葉が違いました。それを、明治の30年代に既に指摘した国語学者がありますけども、「私にもそれをください」これが通用語だということですね。いわば標準語的表現ですね。ところが、東京の、というより、江戸っ子の男の子になると「あたいにもそれをくん」って言っているんですね。女の子は「わたしにもそれをちょうだい」。それから書生社会になると、「僕にもそれをくれたまえ」。大工とか鳶師とかいう職人になると「わしにもそれをくんねえ」。同じ東京だけでも「私にもそれをください」と、「あたいにもそれをくん」と、「わたしにもそれをちょうだい」と、「僕にもそれをくれたまえ」と、「わしにもそれをくんねえ」と、これだけ区別があるということなんです。あつたと思います、実際。ですから、全国にわたって見ると、これはもう大変な違いがあつて、明治時代はやっぱり仙台の人と鹿児島の人とは、話がちゃんと通じなかった。私の記憶では少年時代に父親に連れられて仙台の松島へ行ったら、こういう何か記念品のステッキみたいなものを売っていて、これを買え、買えって東北弁でおばさんが言うんで、それ何なのって聞いたら、くづらのすずって言うんですね。クジラの筋なんですね。現在でも秋田の知り合いなんかの言うことを聞いていると、菓子を食わないかって勧めるのを「菓子がねが」っていう。そしたら片いつばは食べるよって言うのを「ぐっ、ぐっ」って言う。菓子がねが、ぐっ(笑声)。ですから随分違うんですし、その土地によっては自分のとこの表現を卑下して劣等感を持ってらっしゃる方があるかもしれないけれども、これはやっぱり日本語が日本文化を背負って立っているように、その土地の方言というものはその地方文化をしょって立っている言葉ですから、ある程度大事にした方がいいんで、みんなが同じように標準

語を話しだしたら色とりどりの文化というおもしろさは消えると思いますね。

それでは日本語の標準語って何かというと、一般には東京の山の手言葉だと思われています。しかし、山の手言葉というものはいつごろ成り立ったかということになると大分疑問がありますし、言語学的に東京の言葉を突き詰めれば、今言ったような違いとともに、大きく分けて東京山の手方言と東京下町方言の2つの方言に分かれるだけなんです。下町方言というのは、この間亡くなった古今亭志ん朝のような落語家が主に使う、例えばふるしきぶら下げてっていうふうな。それから「ひ」と「し」とを混同しますね。私の名前は「あがわひろゆき」というんですけど、「しろゆきさん」になる。これが東京下町方言の特徴です。それに引き換え、東京山の手方言というのは、新宿、宿題というふうな言い方する、主として士族階級の言葉の名残のような言葉が東京山の手方言で、東京山の手方言が明治以後、標準語の機軸となったことは事実であります。ですから、一般の人は東京の東京言葉、もっと狭く言っても東京山の手方言が日本語の標準語だと思っておられますけれども、実際は違うんですね。標準語というのは一種の架空の言語でありまして、この架空の言語をしゃべっている人が、いるかないかということ、いるんです。それは、NHK、その他のテレビ、ラジオで訓練のきちんと積まれたアナウンサーのニュースその他で、きちんとしゃべる日本語が日本語の標準語であります。そのかわり、お気づきのように個人の特色は消えていますね。だれがしゃべっても同じイントネーション、同じアクセントで同じように聞こえる日本語です。しかし、これに対して文句を言うところはな

いんです。明治以来130年ほどたちますけれど、鳥取方言をなぜ日本の標準語にしなかったかというようなことを言う地方ってものはないんですが、たった1つある。それは京都の人たちですね。今日、裏千家の宗匠が国際ロータリーの会長キングさんの代理でいらっしゃるんですが、あの京言葉をなぜ明治維新のときに新しい近代国家、日本の標準語の規準としなかったかという議論は今日でも蒸し

返されて、言語学者の耳には届くそうです。確かにそれは理由があることで、江戸300年の荒っぽい関東言葉に駿河あたりの方が入って、ごちゃ混ぜになって洗練されて出来上がった江戸言葉とはまるで違う、歴史の古い、千年以上の歴史を持つ雅な言葉だという。それを美しい日本語として、日本語の標準語としたらいいじゃないかというのは、まことにこれも道理のあることでありますけれども。明治の日本は何を志したかという、周囲を見渡せば、ほとんどのアジアの国が西洋の植民地であります。うっかりしていたら日本も西欧列国の植民地にされてしまう。それを逃れるためにはいわゆる富国強兵で産業を興し、貿易を盛んにし、国を富ますと同時に、強い立派な陸海軍を持って、侵略してくるものがあつたらこれと戦って日本を守らなくては、植民地から守らなくてはならないという当然の大方針を立てて、そうしてやがて日清戦争に勝ち、眠れる獅子といわれた清国に勝ち、それから世界の大強国であったロシアにも日露戦争で勝ち、40数年にして世界の一等国といわれる地位にまでのし上がるんですけど、その過程で京都言葉を標準語にして軍隊でも使っていたらどうなったか。「向こうに敵が見えてるがなあ、はよう鉄砲を撃たんかいな」(笑声)なんて言っていたら、どうも日清戦争で負けてたんじゃないかという説があるんです。それはともかくとして、京都言葉が美しいことは事実であります。したがって、京都、もっと広く言えば関西方言は東京方言よりも豊かな表現力を持つてるところがあるし、雅な一面が確かにあります。だから、私のような広島育ちのもの、あるいは名古屋、東北で育った人間は東京へ出てくると自分のお国なまりを出すのが恥ずかしくて、つい、東京言葉ができるようなふりをしたがるんですけども、ちっともそんな気を起こさないのは京都、大阪、あるいは兵庫から東京へ出てきた人で、平気で関西言葉を学校でも使いますね。そのかわり、テレビのニュースでアナウンサーが関西のものを、地名や事物を東京方言の、つまり標準語のアクセントで言うと、文句、苦情の電話がNHKにかかってくるそうです。一例として言いますと、山陽本線に兵庫っていう駅がありますね。これは兵庫の駅、三ノ

宮からもう少し西に行ったところ。「けさ、6時半ごろ、兵庫の駅の構内で脱線事故のため」というふうに、標準語でアナウンサーはニュースを伝えますが、たちまち電話が鳴るんですってね。今、ニュース聞きましたけど、兵庫って駅どこにあるんですか。兵庫って駅はありますけど(笑声)。これはやっぱり関西の人、特に京都の人はですね、フランス人と同じで自分たちの言葉に非常に誇りと自負とを持ってるので、これはこれでやはり大事にさせていただかなくてはならないんで、京都の人がべらんめいを使いだしたら、これはもう本当の日本文化の破壊であります。

お話したいことはまだまだたくさんあるんですけども、海軍というのは5分前と言いましてね、非常に時間うるさいんで、許された5時まであと2分しかない。さっき、和歌、短歌の言葉を、表現が、ちっとも外来語を交えずに非常に豊かな表現をし得る例として、万葉集の歌から斎藤茂吉の歌まで挙げましたけれども、詩の方でも我々のすぐ上の先輩にあたる佐藤春夫さんなんて人は、実にほとんど外来語を使わずに、実に美しい日本の風景を詠んでおります。これは何ていう題でしたかね。初夏が来たことを歌った佐藤春夫の詩ですが、「山人は初音を伝え 里人はかわずを聞きし その翌の卯月ついたち つばめきぬ花ぐもりして」という非常に美しい詩があります。もう一遍読みます。「山人は初音を伝え 里人はかわずを聞きし その翌の卯月ついたち つばめきぬ花ぐもりして」。外来語は「翌の」だけなんですね。翌日と言うときに、外来語が1つ入っておりますけども、あとは全部本来の日本語で、つまり大和言葉でこれだけ美しい詩が20世紀に創られております。そのことを思うと、繰り返すようですが、今日の日本語の乱れ、あるいは急激な変化、それから過度の外来語の取り入れ方というのは、じじいのくせかもかもしれませんけれども、憂うべきことで、皆さん方にもどうかその点をお心の隅にとどめて、ロータリアンとしてのご活躍をしていただきたいというふうに思うのを私の結論にしまして、大変取りとめのない話になりましたが、これで記念講演を終わることにいたします。ご清聴ありがとうございます。(拍手)